

高齢化社会における余暇

ジョン・R・ケリー*

(西野 仁訳)

Leisure in Later Life

JOHN R. Kelly PH. D.

Aging に関するさまざまな社会学的研究がなされてはいるものの、レジャーについてのそれはまだまだ少ない。しかし、多くの新しい視点からの研究がはじまりつつあることも事実である。その一つに、Aging を単なる deterioration とみるのではなく、development として、また「人生の余った時間」とみるのではなく「人生の Culmination」として、あるいは、仕事からの retire というよりは、さまざまなことからできる opportunity としてとらえようとする視点からの研究がある。

これから行おうとする分析は、上述の研究をすすめるための、基本的な一つの考え方の概略にすぎない。

それは、レジャーについて、「その社会的役割やその存在価値は、人生のある時期においてのみクローズアップされるのではなく、人生のどの時期においても重要である」という仮定から出発し、「レジャーを、余ったものとしてではなく、人生における中心的ことがらとしてとらえよう」とする考え方に立脚する。

そのために、まずはじめに、レジャーをどう定義するかに触れ、ついで、高齢化社会におけるレジャーの役割を研究するためのモデルとして、The Role Identity Model を紹介し、それが、どのように、老後のレジャーの重要性を理解するための基本となるかについて考え、さらに、人生を集大成していく時期としての Culmination におけるテーマについて若干の考察を試みたい。

I Leisure and the Life Course

老後のレジャーは、「余ったもの」か「重要なもの」か

という論争は、レジャーを、どう定義するかということと関係する。

多くの人々が、さまざまな、レジャーの定義をしているが、ここでは、いくつかの重要と思われることがらについて考えてみたい。

まず、Freedom ということについてである。これはアリストテレスの時代から、ずっと継続している定義領域であり、もし選択の自由がなくなった時、レジャーは、レジャーでなくなってしまう。

つぎは、Social ということについてである。

レジャーは、個々人の内面的領域と関係あることがらであると同時に、社会的なことがらでもある。レジャーは、それ自体で社会的機能をもつのみではなく、その目的によって次々と形づくられていく存在でもある。そうした点から、レジャーは、文化や、社会システムの存在の意味から多面的であるが、全体としては、その社会システムのいずれの機関からも決定はされない。行為者によって、それは選択されるのである。

しかし、選択は、個々のさまざまなことがらとの関係の中で行われるのであろうから、新たに、レジャーは、どのように選択されるのかということが問題となってくる。

それを説明する有力な手がかりとして、次の三つの要因があげられよう。第一は、レジャーはそれ自身のために意味があるのであって、他の満足のための手段ではないとする、Intrinsic-Satisfaction である。また第二には、レジャーのもつ自由さは、自我の試みと達成にとって重要な機会となるとする Self-Development で

* 本稿は第12回学会大会での講演をまとめたものである。

* Dept. of Leisure Studies University of Illinois at Urbana-Champaign

ある。第三は、レジャーは、より親密な人間関係が認識される基本的集団を発足させたり発展させたりするとする Social-Bonding である。

こうしたアプローチからでてくる定義は、決して複雑ではない。

レジャーは、純粋に心的状態であるというよりはむしろ doing Something をさすと考えられよう。また、その定義は、経験的な要因と社会的要因とを結合しており、さらに、選択の Freedom ばかりでなく、Intrinsic-Satisfaction や、Self-Development や Social-Bonding について、それを含んでいるか、あるいは了解していると考えられる。

C. Gordon は、「レジャーは、手段的なテーマを越えてその中に意味をこめた自由に選択できる個人的活動として行為の面から概念化できる」¹としているし、K. Roberts は、「レジャーは、比較的自己決定される non-work な活動」²と定義し、私自身は、「レジャーは、主として、それ自身のために選ばれる活動」³と定義している。

これらの定義のいずれもが、レジャーは二次的であり、より重要な人生の他の要因によって決定づけられるという考え方に対し、否定した見解をとっている。レジャーは満たされるための空白な時間ではなく、まさに、さまざまな社会的な力、機会、制限などのまっただ中において選択される活動であろう。

レジャーが、このように定義された時、レジャーとして非常に緊張した活動とともに、誰からも指図を受けない、リラクゼーションの活動の両方が存在することになる。つまり、自分自らや、様々な用具や材料を使っての、非常に高い investment のためと、時間をうめることの二つの面が存在するのである。

ところで、人生におけるレジャーの重要性について考える時、人生のそれぞれの時期においてレジャーがめざす方向性と、レジャーの中身とが変化したり、あるいは継続したりするという事実を理解することが必要となってくる。

レジャーの変化は、年齢の変化と関連して起る Resources, Opportunities, Role-Expectation や Self-Definition の変化などの一連のことがらと大いに関係がある。さらに、レジャーは新しい Identities を確認したり Self-Definition を適応させることを求めたりするための重要な場を用意することになるかもしれない。

我々が、レジャーを理解するためや、老後の adaptations に関して、The Role-Identity Model の可能性

を試そうとするのは、こうしたみかたに基づくものである。

II The Role Identity Model

たぶん、社会現象を説明しようとするためのどんなアプローチでも、全てがあやまりであるようなものはない。それぞれのモデルが長所を持つと同時に短所を持っていることは言うまでもない。

従来、しばしば使われてきた The Activity Model などを検討したが、老後におけるレジャーを理解するためには、そのいずれもが不十分であった。

そこで、行為者のもつ目的や、社会化の要因、環境との関係や、Identities を獲得していく仕方など、レジャーと、それに関わるさまざまなことからの両方の複雑さを包含するような過度に単純化したモデルをつくる必要があると考え、これから述べるような、The Role Identity Model を考えた。

われわれの社会は、その社会制度そのものに、調和のとれた役割や期待がある。また、そこに生活する人自身も、自分自身の役割を定義づけたり、再定義している。つまり、社会に生きている人々は、社会制度の中に、自分の Social Identities を持つような地位を有していたり、あるいは、自分からも、自分の役割をどう演ずるかを決めるような Personal Identities を有している。自分の役割を演ずるということは、一般的に思い浮かぶ、その役割に対する期待を演ずることとともに、一歩すすめた、その役割をどのように演ずるかという演出をも含むことになる。

McCall と、Simmons によれば、Role Identities とはまさにこのことであり、役割の中に、自分自身を、どのように定義するかということである。

人は、一生を通じて役割が変化するばかりでなく、我々の役割における Identities もまた変化する。学生時代の役割、結婚しての役割、親としての役割などの変化とともに、友だちとして、仕事仲間として、あるいは、スポーツ参加者などとして、一人の人間が、さまざまな場面で役割を期待され、その役割が再定義されていく。人生にとって基本的なことがらは、様々な変化に応じて、いかに、Role-Identities を獲得するかにあると言えよう。

高令者が直面するであろう停年は、仕事の役割の変化を生むだろうし、親としての役割は、子供が育ちあがった時に大きな変化が生ずるのである。

こうした変化に、レジャーはどう関係するのである

うか。その変化と同一ではないだろうが、また、離れもしない。レジャーは、生活という織りものの中でくりひろげられる、役割と、Identitiesの「織り方」に関係してくることがらと考えられる。

The Role Identity Model は、人生を通して、継続と変化の両面を想定している。

ところで、ライフコースの分け方には、さまざまな方法があるが、ここでは、人生を大きく三つの時期に分ける方法をとりたい。その三期とは、Preparation, EstablishingとCulminationである。Preparationの時期は、人生の準備期として親から学んだり、教師や友人から学んだりする時期である。第二期のEstablishingは、一人の人間として十分一人だちし、家族を養い、社会的な地位を獲得したりする時期である。また第三期のCulminationは、それまでの生き方を、あるまじったものに集大成していく時期ととらえることもできよう。もちろん、こうした分け方は、あくまでも一応の区分であって、個人によってその移行時期に差があることは言うまでもない。

さて、以降、われわれは、人生における第三の時期つまり、Culminationについて検討しよう。その目的は、老後の発達ということがらにおいて、レジャーがどのような役割を果たし得るかという可能性を検討することにある。

III Culmination

大部分の生活が、過去のものとなり、未来に限りがあると認識された人生の最後の時期をCulmination Periodと呼ぶ。

この時期は、今までずっと望んできたことがらに対して自分を投資することや、社会に対する自分の役割など、さまざまなことがらが、しだいに低下してくる時期である。ある者は、これからの生活に対し、恐れたり、悲しんだりするかもしれない。しかし、また、自分のおかれた状況を受け入れ、正しく認識して、自分の一生を意味あるものにまとめあげるために、過去のことがらをも含め、さまざまなことを、首尾一貫したものに統合しようとする者もいる。西暦2,000年になっても高齢者にとっては、収入の低下、仕事における役割の低下、親としての役割の低下など、多くのことがらが低下していくと考えられようが、それらの内容は、今日のそれとは異なるものと予想できる。平均余命も、教育程度も収入も、今よりは高くなるであろうし、総人口に占める高齢者の割合も多くなるであろう。

しかし、その時代でも、やはり老人達は死と相対していかなくてはなるまい。そして、やはり一個人として、いかに自分を統合するか、あるいは、どのように社会的に適應するかということのための方法を追求める努力が続けられるであろう。こうした状況の中で老人達にとっては、いかに独立を維持していくかということと、どのように自分自身の方向づけをするかということが、中心テーマとなろう。もちろん、そのためには、適当な健康と、経済的裏付けとが、大前提となることは言うまでもない。

人生の、どの段階でもそうであるが、特にこのCulminationの時期で重要なことがらは、自分自身で、自分は役に立つ、価値ある人間であると感じとり続けることである。このことは、その人が果してきた仕事の役割、その人のもつ経歴、経済的なことがら、社会的達成や適應の程度や満足度の他、高齢者が抱えている文化的評価や、レジャーにおける満足度などと大きくかかわってくるからであろう。

これらのことがらを考える際には、当然、Work IdentitiesやFamily Identitiesにも触れる必要があるので、時間の都合上、Leisure Identitiesのみについて、ここでは考えることとしたい。

レジャーが、残された人生に対して意味をもっていたり、やりがいのあることを与えたりするような、Identitiesの中心となっている人はどのくらいいるだろう。

もちろん、レジャー産業が提供している機会を利用して、活動それ自体に満足したり、また、目的をもって継続的に発展していくような活動を実際に行っている人はいる。しかしながら、多くの人にとっては、レジャーは単に生活の一断面であったり、家族のきずなを固くするための一手段であったりしている。

現実はそのようであるが、しかし、高齢者にとってレジャーは、それ自身意味をもつ活動であるという以上に、その活動を通して、Identitiesが表現されていく活動ととらえることができよう。高齢期において、レジャーは、徐々に何かをやりとげているという自己概念や、学び、成長、個人の投資、自己表現などに対する満足感を生みだす、Role Identitiesを発達させるための機会を与えてくれる。

高齢者のレジャーは、その行為者が、すでに、十分その活動を満足できるだけの基礎を持っていたり、その活動が、集団で行われる時に、長く継続されるようである。またレジャーは、今まで経験したことのない

新しいこと、あるいは、それまでやってみようかと感じてはいたが実際には行われていなかった活動をはじめのためのチャンスを提供してくれる。老後の生活において、経済的ことがら等で、レジャー活動が制限されることは否定できないが、レジャー以外の多くの役割が、行き場を失っているような状況の中で、レジャーは、生活のスタイルやパターンを再び組織できるような特別な空間であることができる。少なくとも、レジャーと高齢者の社会的適応は非常に密接なそして重要な関係にあると言えよう。またレジャーは、交友関係がはじまり、発展し、拡大していく社会的空間でもある。とくに家族的で、インフォーマルで、そして活動を基本とした組織は、最も一般的なそうした空間であろう。

ところで、高齢者のレジャーについて、さまざまな異った活動をすることが、レジャーにおける満足に貢献するだろうとする以前の仮説は、役に立たないことが、わかってきた。それよりはむしろ、数は多くなくとも、より深く、より熱心に、その活動に打ち込めるかどうか、大きな満足を得ることができるかどうかに関係してくると考えられる。このことは、レジャーを考える際、重要な問題である。活動の種類よりは、その活動に対する取り組み方の程度を測定することの方が、重要ではあるまいか。

IV Themes of the Culmination Period

この時期において問題となるテーマは、過去の人生を振りかえっての再評価と、今後の新しい生活を整理し、発展させ集大成していくことにある。

死というさけることのできない枠組みや、人のもつ可能性に対する制限のような、さまざまな制限が前提として存在する中で、これらの制限を認識して、それが何を意味するか、そして、どのように生きたら生涯は威厳をもって完全なものにすることができるのかということ問い続けねばならない。たとえ、過去への評価が強烈な、そして精神的いたでとなるようであっ

ても、さらに自分自身を成長させ、発展させていくためには、さまざまな生活の糸を選び分けたり、それらの糸を再び織ったりすることが要求される。

ある者は、家や、家族としての役割に、老後の生活の中心を置こうとするかもしれない。また、ある者にとっては、レジャーに、人生の意味や、達成することの喜びを求めるための最適空間としての価値を見出すかもしれない。いずれのケースでも、彼らの残りの可能性や投資についての再評価が、そこにはあるだろうし、また、さまざまな形での再方向づけがなされよう。

もちろん、今日の社会では、これらの評価や、再方向づけ以前に解決されねばならない健康問題や、経済的問題が存在していることは認識しておかねばならない。

Culminationの目的は、誠実と、信頼性をもった生活にある。そして、それを達成するための機会は、以前のRole Identitiesや、欲求を評価し、さらに新しいIdentitiesや、それらの中身を再構成するに至るまでの十分な自由の中にあると考えられよう。そして、レジャーは、この再構成していくプロセスに重要な貢献をするにちがいないと思うのである。

しかし、現実には、こうした積極的な姿勢で老後を生きる人ばかりではない。老後の貯えや、資源に不足している人にとっては、老後は自分の生活が分解してしまう時期にもなりかねない。老後は、可能性を追求できる機会であると同時に、大きなリスクを伴う機会でもある。

レジャーを研究しようとするわれわれにとって、これらのことがらを、いかに深く検討できるか、さらに歴史の中に生きる人間として、どのように変化していくのか、愛をもって、みきわめる必要があるだろう。

高齢者のレジャーを、どのような方向に導く必要があるかを真剣に討議する時期に、遭遇しているといえよう。

REFERENCES

1. Gordon, Chad, C. Gaitz and J. Socott. *Leisure and Lives: Personal Expressivity across the Life Span*. In *Hand Book of Aging and the Social Sciences*, R. Binstock and E. Shanas, eds. NY: Van Nostrand-Reinhard, 1976.
2. Roberts, Kenneth. *Contemporary Society and the Growth of Leisure*. London: Long man, 1978.
3. Kelly, J. R. *Leisure*. Engliwood Cliffs, NJ: Prentice-Hall 1982.
4. McCall, George and J. Simmons. *Identities and Interactions*, 2nd ed. NY: Free Press, 1978.